

◇続 無知なホーリスくんに執着された際の対処法ってなんですか 特典 SS◇

『ロクの面接対策一週間』

※ヒロインの登場あり。苦手な方は閲覧をお控えください。

※本編中、トラック 03 以降のお話となります。

ロクがあなたの会社の面接を受けると決めてから、あなたの行動は速かった。

まずは面接で行われる軽い試験の対策、そして最後に花形である面接の練習だ。

休みの日に彼と共に訪れた書店で、参考書を吟味したのちに購入し、ネットでレンタルのスーツを予約した。

せっかくロクが面接を受けたい、社会に出たいと口にしたのだから、全力で支援しなければならない。

それに、言いだしちゃは自分である。

ロクには自分の力が必要だから。そんな根底にある甘えのようなものを逡巡する余地もなく、あなたは仕事帰りの疲れた体を奮い立たせ、彼の対策に向き合った。

とは言いつつも、ロクの面接が決まったのはあなたのお陰でもある。

元々の方針では、会社が連携している人材派遣サービスより選出するつもりだったらしいが、あなたの熱い要望と会社からの厚い信頼から、ロクの面接が形になったのだ。

だからまあ、採用されるのもやぶさかでない。やる気と誠意があれば、きっと花咲くだろう。

(でも今のロクには、最低限の一般常識とマナーがない。あとは…うーん…。誠意も)

「…よし。これで全部かな。とりあえず、今日の夜はこのページからやろう」

バサッ、あなたがテーブルに置いた参考書を目にして、ロクの肩はみるみるうちにしぶんでゆく。

それもそうだろう。

一昨日、あなたが「自分の会社で清掃員として働くか？」と提案した際も、勉強というワードに露骨にイヤな顔をしていたのだから。

勉強なんて、好きだと言う方が珍しい。

これまで適切な教育を施されていないロクからしてみれば、勉強というものは未知の魔物だろう。加えて言えば、なにか目的を果たすことの先に「褒められたい」を求めている彼だ。苦手なものは、とことん遠ざける特性がある。

嫌いな野菜をひとくち食べるよりも、数時間の勉強をする方が何十倍も険しい道だということで。

「…ど、どうやって、やればいいの？」

「普通に答えを書いていけばいいよ。順番に、こっちから」

「わ、わからなかつたら…？」

「わからなかつたら、その問題は飛ばして次の問題をやろう」

あなたの言葉を受けても、ロクはなんとなく腑に落ちない様子で鉛筆を握る。

そして、おずおずと参考書に視線を落とした。

勉強の邪魔になるだろうと思いテレビを消したため、リビングには掛け時計の音のみが響く。

目の前に座ったロクを見つめながら、あなたはなんでもないようにコップの持ち手を撫でてみる。うん。冷たくて硬い。

「…あ、あの」

「…ん？」

「君は…なにもしない、の…？」

(……あ)

いや、 そうか。 そうだ。

いつも一緒にいたがるロクでも、 勉強をしている時はひとりにしてほしいのかもしれない。

あなたはコップの持ち手に指をかけて、 パッとイスから立ち上がる。

「ごめん。 集中できないよね、 私向こうに——」

「え、 あっ、 いや！ ちがう…！ いてほしい…っ」

「…ほ、 本当に？」

「う、 うん…。 そっちのほうが…いいから…」

——ホッ…。

(…ん？ ホッ？)

一瞬、 胸のなかでなにかが上ずって、 そのまま定位置にすとんと戻る。

その言い知れぬ感覚を、 すぐに引っ込んだあなたは「じゃあ…」と再びイスに腰かけた。

そんな面接対策一日目。

とりあえず約束通り、 丸々一ページ解いたロク。

今日は小学生低学年程度の算数の問題を与えた訳だが、 足し算引き算は許容範囲。

かけ算やら割り算やらはやはり知らないらしく、 空白だ。 ここは軽くでもいいので出来るようになった方がいいだろう。

ただ意外なことに、 文章問題を解けていたことにはあなたも驚いた。 もしや文章問題は、 彼のなかで得意だったりするのだろうか…。

明日は国語の問題を重点的に出してみよう。

そう思いながら、 あなたは隣の布団で眠るロクの解けそうな手を、 少しだけ握り返した。

翌日の二日目の対策である国語の問題は、あなたが仕事中である日中に彼に課した。

昨日の予想は的中して、やはりロクは簡単な文章問題なら難なく解けることが判明したのだ。未だ読める漢字は少ないが、辛うじて読める漢字とひらがな、そしてインスピレーションで回答しているらしい。

その部分をあなたに褒められたロクは、次の日の三日目、肃々とテーブルに向かい今度は理科の問題を解いていた。

正直、理科や社会に関しては、記述問題としてそこまで出題されないと予想しているが、触れておくことに越したことはないだろう。

初めてみるような植物の断面や名称、カエルの進化の図にロクは興味津々な様子で目を輝かせている。

「…ね、ねえ、知ってる？ ミツバチ、は赤色が見えないんだって…！」

「へえー、そうなんだ」

「イヌもネコも…人と見えてるけしき？ が違ってて…」

「…ふふ」

参考書のミニページに掲載された豆知識を、嬉々として披露するロクに、あなたはつい頬がほころんだ。

やっぱりこういうところはストレートに男の子なんだなあ、と思いつつも、過去に彼がどんな教育をうけていたのだろうと心が遠ざかる。

詳しく話を聞いたことはない。

それを聴いたところで、今の自分が昔の彼を変えられる訳でもなし。

ふかく、ふかく知ってしまった…戻れないところまで、落ちてしまう気がするのだ。

「…このちじょうにいる生き物は…みんなそれぞれのやくわり、を持って生まれてきます…」

「…うん」

「や、やくわり…ってなに？」

参考書から顔を上げるロクは、キラキラした瞳で尋ねてくる。

漢字の意味がわからないから、きっとなにかカッコイイ部位だと思っているのかもしれない。

あなたは、ふっと目を伏せて自分の手を眺めた。

「…自分が持てる荷物の量」

「？」

「…いや、なんて言うんだろ。まぁ、自分が他の人と違ってできること…みたいな感じ」

「…自分が、できること」

訂正したあなたの言葉を受けて、うーんと唸るロク。

「ほら、私だったら…。仕事もそうだし、家事とか料理もそれに入るかな」

「…うん」

「別に他の人と比べなくてもいいんだよ。自分が得意なことで——」

「あっ」

と、あなたの言葉に被さるように、ロクは目を見開く。

そして、どこか誇らしげに口角を上げた。

「俺…でもっ、いっしゅうかんぐらい、何も食べなくてへいき！ あと、いろんなもの合体して…なにかに使ったり…」

いや、それはなんかちょっと違うのでは。

そう言いかけたあなたは、グッと我慢してからなんとも言えない顔で「そ、そうだね…」と返す。

どう考へても路上生活で会得した生きる術、だし、それが彼の役割だなんて思える訳ない。

まあ、ある意味では動物に近い生への実直さと、防衛本能が生んだ賜物と言えるだろうが。

「…じゃああれだね。無人島に取り残されてもロクがいれば安心だ」

「…む、むじんとう？」

「あ…。えっと、島のこと。周りが海で助けも来ないの。食べ物とかテレビもなくて…」

その説明を聴いたロクは、「ええ～…」と眉間にしわを寄せて、口をあんぐりと開く。

「やっぱりちょっと怖いか」とあなたが笑えば、彼はううんと首を横に振って、グッと両手を握り締めた。

「だ、だいじょうぶ！ 僕、むじんとうも怖くない！」

「ほんと？ それは頼もしいな～」

「もし…も、ちきゅうが大変なことになっても、俺がいればだいじょうぶ！ 絶対、君のこと守るから…！」

「はは、宇宙人が襲ってきても？」

「え？」

「ん？」

「…う、うちゅうじん？」

つい、自分でも子どもっぽい、ずいぶん浮かれた言葉がでてきてしまった、と。

あなたはひとつ咳払いをして「今のはしね」とロクへ向き直る。

だが、今の彼の知的好奇心はとどまるることを知らないので、あなたがそっぽを向いても、うちゅうじんってなに!? 悪いやつ!?と嫌味なく訊いてくる。

うん、まあまあ。以前のなにも知らなかったロクが、これだけ物事に対して興味を示している。これほど嬉しいことはないだろう。

あとはあなた以外の人間にも、関心を持ってもらえばいいのだが。

「じん…って入ってるから、人!？」

「…えー…まあ……うーん、どうだろうね」

そんなこんなで三日目が終了し、四日目は社会（地理）、五日目は再び国語…もとい敬語のマナーと面接の対策を施した。

六日目は届いていたレンタルスーツの着用、そして風呂からあがったロクとぎごちない距離感で面接の最終調整を行い、面接直前の七日目。

いつものように仕事から帰ってきたあなたとロクの、ほぼ恒例になった勉強会が開かれ、今まで対策をした一般常識全般の振り返りを行っていた。

「——うん。だいたい正解してるし、今日はこの辺でいいんじゃないかな」

「…え…。もう、いいの…？」

「面接前に詰め込みすぎてもよくないし、あとは明日に備えてリラックスしよう」

「今日は長めにタブレット使っていいよ」

そう言ってあなたは、イスから立ち上がり、テレビ前に置いてあるタブレット端末をロクに手渡す。

「あ、ありがとう…！」

「うん」

(——あ、)

ふと目にしたロクの頬。

左に貼った絆創膏がとれかけているのを見てあなたは、タブレットを手にしてルンルン気分のロクの背中を追いかけた。

「ロクっ、絆創膏が取れそう」

「え、あ…！ ほんとだ」

「はい、新しいの」

いつはがれてもいいようにと、テレビ前に置いてある小物ケースから、あなたは絆創膏を一枚取り出す。

タブレットを持っていては、絆創膏を開封できないだろう。

そう、あなたはいつもの癖でロクに手を伸ばそうとした時——彼はタブレットを右手に持ったまま器用に絆創膏の包み紙を開いて、さも当たり前のように自身の左頬の傷をしづかに覆った。

(……あ。もう、ひとりで貼れるんだ)

「…よし、できた」

「…………」

「あれ…。どうしたの？」

ハッと我に返って、なんでもないような顔を向ける。

そうだ。そう。

もう何回も貼り直してるんだし、手だってロクの方が自分より大きい。

コツさえ掴めれば、タブレットを持ったまま絆創膏を貼り直すことくらい、造作もないはずだ。

このまま、このままロクは、どこへ向かうのだろう。

明日の面接で採用されて、社会に出れば、いつか自分のことなど忘れてしまうのかもしれない。それが嬉しいのか、悲しいのか、感情にのせることは難しくて、とてつもない不安に襲われる。

もしかしたらきみは、このまま成長して、私の目にはみえない色の宇宙船で元の場所にかえってしまうのかもしれないね。

天女に彼を引き渡すこと。それが、私の役割なのだとしたら——。

(…なーんて)

「ロク」

「——え、 はいっ」

「明日、 面接頑張ろうね」

「……う、 うんっ」

私もいっしょに連れてって。

そのひと言が、 寸でのところで出てきたらいいのだけど。

.